

# ものぐさ太郎から三年寝太郎へ

—— 昔話と中世史 ——

保 立 道 久

はじめに

- 一 物ぐさ太郎の性格分析(1)
- 二 物ぐさ太郎の性格分析(2)
- 三 物ぐさ太郎の隠されたモチーフ

- 四 寝太郎と嗜眠症
- 五 下人の眠りと覚醒

## 論文要旨

民話・「三年寝太郎」の背景に何を考えるべきか。類似した説話、『御伽草子』の「物ぐさ太郎」譚については、四つの代表的理解がある。第一は、「物ぐさ」「鬱」を「のさ」「怠」に引き付けて理解し、その実像として「のさ者」なる下人の反抗的性格を措定する見解である(佐竹昭広)。第二は物ぐさ太郎を「聖」を中心にして理解する立場、すなわち彼が善光寺如来の申し子であることを強調する立場である(砂川博、徳田和夫、桜井好朗など)。第三は、近年歴史学の側から提起された、太郎の原像に、村人に扶養されていた乞食・非人を措定する見解、「賤」としての太郎を強調する見解である(藤木久志)。第四は、太郎を「道化」あるいは「痴」者にとらえる見解であり、それは馬鹿舞はなしと太郎の同一性という問題に関わってくる(小松和彦)。太郎は、その居住地の領主・「あたらしの郷」の地頭の道化から出発し、京都に登っても道化から立身したということになる。これらの諸説を「総合」すると、「ものぐさ太郎」は、

「鬱」にして「ノサ」なる心意を基底にもちつつ「怠」「聖」「賤」「痴」などの諸性格を遍歴する存在であり、物語の方向は太郎の「鬱」からの脱出と「貴」への転化にあるとまとめることができるだろう。

問題は、「モノ」という語が「時に悪魔を意味する」語であったことが示すように、その媒介となったのが「狂」であったことであり、それは寝太郎の病が癲癩性の嗜眠症と理解できることに対応している。現在では生活上の不便が極小になるまで薬物療法が発展して十分な治療が可能になっているが、癲癩は、中世では治療方法がなく、二次的な障害を含めて多様な症状を有していた。本稿は、この病についての基本史料である下人の人身売券に関する研究(秀村選三、安野真幸)の意味を強調したものであり、特にそこに現れる「大寝」なる言葉が嗜眠症的な症状を意味すると推定したものである。